

A large, solid blue triangular shape on the left side of the page, pointing towards the top right corner.

Laws of
the Game
2014/2015

サッカー競技規則

はじめに

サッカーの競技規則（Laws of the Game）は、国際サッカー評議会（The International Football Association Board）によって制定される。そして、その冊子が国際サッカー連盟（FIFA：Fédération Internationale de Football Association）により発行され、FIFA ならびに FIFA に加盟している各大陸連盟および加盟協会下で行われるサッカー競技は、すべてこの規則に基づきプレーされる。

サッカー競技規則は、毎年2月または3月に開催される国際サッカー評議会の年次総会で協議され、改正があった場合、その決定について FIFA から通知される。

日本では、FIFA が基本としている英語版を（公財）日本サッカー協会が毎年改正部分を含めて日本語に翻訳、表現を見直しながら出版している。もっとも、文章に疑義が生じた場合は、競技規則の注解の「公式言語」にあるよう、英語版の文章が正式なものになるので、英語版の競技規則に基づき解釈することになる。

本書には、条文や国際サッカー評議会の決定で加盟協会に任せられている部分などについて、（公財）日本サッカー協会の考え方や日本でされるサッカーに適用される規定を「（公財）日本サッカー協会の決定」として付け加えてある。また、日本語版付録には、競技規則の的確な解釈や円滑な競技運営のために様々な通達等、さらに、審判員が競技規則をより適切に施行できるように「審判員の目標と重点項目」などの資料を掲載している。特に通達等については、必要に応じて発信、改廃されているので、競技規則そのもの、その解釈等と同様、最新の情報として捉えていただきたい。

（公財）日本サッカー協会はJリーグと共に、フェアプレーの原点となる「リスペクト（大切に思うこと）」を推進している。サッカー競技規則は、審判員や審判指導者のみならず、競技者、加盟チームの役員などサッカーに関わるすべての人たちにとって必要不可欠なものであり、大切に思い、遵守していくもの（リスペクト）である。

本書にある競技規則および付属する様々な内容を十分に理解し、安全で誰もが楽しめるようなサッカーをいたるところで繰り広げていただきたい。ひいては、それがサッカーの健全なる発展に資することになる。

修正

関係する加盟協会の合意が得られており、また競技規則の基本原則が保持されていれば、16歳未満の競技者、女子、年長者（35歳以上）および障害のある競技者の試合では競技規則の適用に当たって修正を加えることができる。

以下の一部またはすべてに修正ができる。

- 競技のフィールドの大きさ
- ボールの大きさ、重さ、材質
- ゴールポストの間隔とクロスバーのグラウンドからの高さ
- 試合時間
- 交代

これ以外の修正は、国際サッカー評議会の同意があった場合にのみ認められる。

男性と女性

主審、副審、競技者、役員について、競技規則ではすべて男性で表記されているが、これは簡略化のためであって、いずれも男性、女性の双方に適用されるものである。

（注：日本語訳には性別がない）

公式言語

国際サッカー評議会に代わり、国際サッカー連盟（FIFA）が英語版、フランス語版、ドイツ語版、スペイン語版の競技規則を発行している。文章表現に疑義が生じた場合、英語版の競技規則に基づくものとする。

符号

左側余白の単線 “|” は、新しい競技規則の改正を表す。

規則	ページ
第1条 競技のフィールド	6
第2条 ボール	15
第3条 競技者の数	17
第4条 競技者の用具	21
第5条 主審	24
第6条 副審	28
第7条 試合時間	29
第8条 プレーの開始および再開	30
第9条 ボールインプレーおよびボールアウトオブプレー	33
第10条 得点の方法	34
第11条 オフサイド	35
第12条 ファウルと不正行為	36
第13条 フリーキック	40
第14条 ペナルティーキック	44
第15条 スローイン	48
第16条 ゴールキック	50
第17条 コーナーキック	52
試合またはホームアンドアウェーの対戦の勝者を決定する方法	54
テクニカルエリア	57
第4の審判員およびリザーブ副審	58
追加副審	59
競技規則の解釈と審判員のためのガイドライン	61
国際サッカー評議会の規約	138

フィールドの表面

試合は、競技会規定に基づき、天然または人工の表面のフィールドで行われる。

人工のフィールド表面の色は、緑でなければならない。

FIFA加盟協会の代表チーム、またはクラブチームの国際競技会のいずれの試合においても人工の表面のフィールドが用いられる場合、その表面はFIFAのサッカー芝品質コンセプトまたは国際人工芝基準の要件を満たさなければならない。ただし、FIFAから特別な適用免除を受けた場合を除く。^{a)}

フィールドのマーキング

競技のフィールド（以下、フィールドという）は長方形で、ラインでマークしなければならない。エリアの境界線を示すラインはそのエリアの一部である。

長い方の2本の境界線をタッチライン、短い方の2本の境界線をゴールラインという。

2本のタッチラインの midpoint を結ぶハーフウェーラインでフィールドを半分に分ける。

ハーフウェーラインの中央にセンターマークをしるす。これを中心に半径9.15m（10ヤード）のサークルを描く。^{b)}

コーナーキックを行うときに守備側競技者に離れる距離を確実に守らせるため、コーナーアークから9.15m（10ヤード）離れたフィールドの外側に、ゴールラインとタッチラインに対して直角のマークをつけることができる。^{c)}

大きさ^{d)}

タッチラインの長さは、ゴールラインの長さより長くなければならない。

長さ（タッチライン）	最小	90m（100ヤード）
	最大	120m（130ヤード）
幅（ゴールライン）	最小	45m（50ヤード）
	最大	90m（100ヤード）

すべてのラインの幅は同じで、12cm（5インチ）を超えてはならない。

国際試合

長さ	最小	100m（110ヤード）
	最大	110m（120ヤード）
幅	最小	64m（70ヤード）
	最大	75m（80ヤード）

ゴールエリア

ゴールポストの内側から、5.5m（6ヤード）のところに、ゴールラインと直角に2本のラインを描く。このラインは、フィールド内に5.5m（6ヤード）まで延ばし、その先端をゴールラインと平行なラインで結ぶ。これらのラインとゴールラインで囲まれたエリアがゴールエリアである。

ペナルティーエリア

1 ゴールポストの内側から、16.5m（18ヤード）のところに、ゴールラインと直角に2本のラインを描く。このラインは、フィールド内に16.5m（18ヤード）まで延ばし、その先端をゴールラインと平行なラインで結ぶ。これらのラインとゴールラインで囲まれたエリアがペナルティーエリアである。

それぞれのペナルティーエリア内に、両ゴールポストの中央から11m（12ヤード）で両ゴールポストから等距離のところにペナルティーマークを描く。^{b)}

それぞれのペナルティーマークの中央から半径9.15m（10ヤード）のアークをペナルティーエリアの外に描く。

フラッグポスト

各コーナーには、旗をつけた先端のとがっていない高さ1.5m（5フィート）以上のフラッグポストを立てる。

ハーフウェーラインの両端に、タッチラインから1m（1ヤード）以上離してフラッグポストを立ててもよい。

コーナーアーク

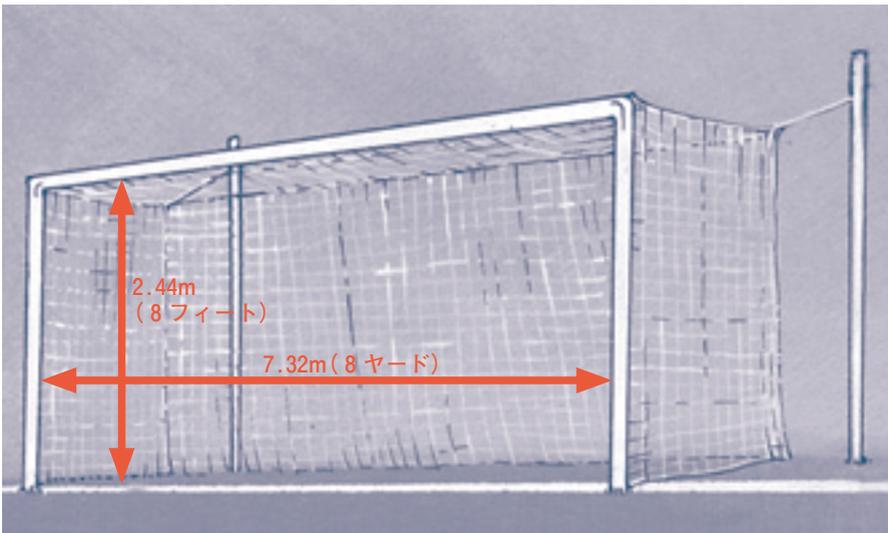
それぞれのコーナーフラッグポストから、半径1m（1ヤード）の四分円をフィールド内に描く。

ゴール

ゴールを1基、それぞれのゴールラインの中央に設置する。

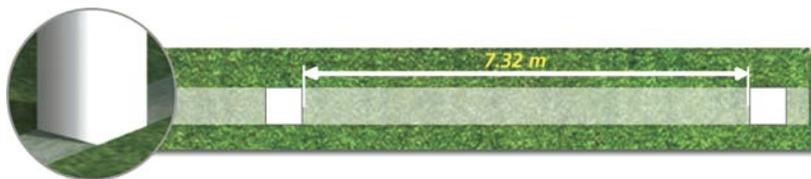
ゴールは、コーナーフラッグポストから等距離のところに垂直に立てられた2本のポストと、その頂点を結ぶ水平なクロスバーとからなる。ゴールポストとクロスバーは、木材、金属またはその他の承認された材質でできていなければならない。その形は正方形、長方形、円形、楕円形のいずれかでなければならず、競技者に危険なものであってはならない。

ポストの間隔は7.32m（8ヤード）で、クロスバーの下端からグラウンドまでの距離は2.44m（8フィート）である。



10 第1条 競技のフィールド

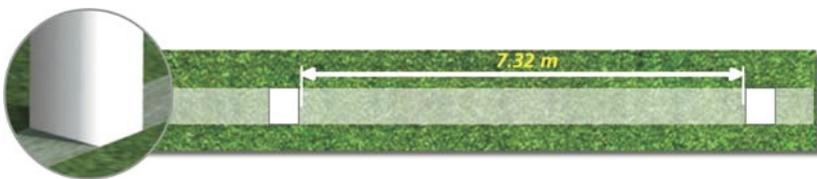
ゴールラインに対するゴールポストの位置は、下図のとおりでなければならない。



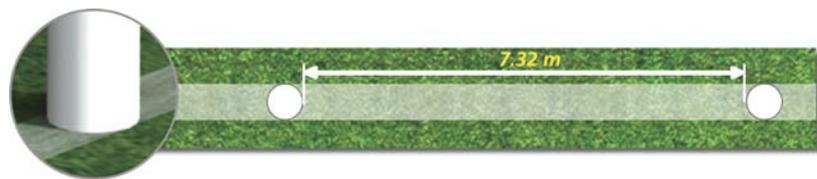
ゴールポストの形状が（上方から見て）正方形の場合、側面はゴールラインに対して平行、または直角でなければならない。クロスバーの側面は、フィールド面に対して平行、または垂直でなければならない。



ゴールポストの形状が（上方から見て）楕円形の場合、ポストの断面の最長部分はゴールラインに対して直角でなければならない。クロスバーの断面の最長部分はフィールド面に対して平行でなければならない。



ゴールポストの形状が（上方から見て）長方形の場合、長い方の側面はゴールラインに対して直角でなければならない。クロスバーの長い方の側面は、フィールド面に対して平行でなければならない。



ゴールポストとクロスバーは、同じ幅と同じ厚さで、12cm（5インチ）以下とする。ゴールラインの幅はゴールポストおよびクロスバーの厚さと同じでなければならない。^{e)} ネットをゴールとその後方のグラウンドに取り付けることができるが、それは適切に支えられ、ゴールキーパーの邪魔にならないようにする。

ゴールポストとクロスバーは、白色でなければならない。

安全

ゴールはグラウンドに確実に固定しなければならない。移動式ゴールはこの要件を満たしている場合にのみ使用できる。

国際サッカー評議会の決定

決定1

テクニカルエリアが設置される場合、この冊子の「テクニカルエリア」と題する部分に記載の国際サッカー評議会が承認した要件を満たさなければならない。

決定2

ゴールライン・テクノロジー（GLT）を使用する場合、ゴールの枠の修正が認められる。修正は「FIFAクオリティ・プログラム」のGLTマニュアルの規定、および前述の「ゴール」の記述に従って行わなければならない。

（公財）日本サッカー協会の決定

- a) JFAロングパイル人工芝基準の検査を確認し、公認ピッチとして公認された施設における、各公式試合実施に関し下記の手順にて決定することとする（2003年11月6日理事会決定）。
 - ①全国レベルの大会（公式試合）

実施の判断は、各大会実施委員会、各種大会部会、各連盟（含むJリーグ）にて方針を決定し、理事会にて承認を得ること。
 - ②各地域レベルの大会（公式試合）

実施の判断は、各地域サッカー協会が行う。
 - ③各都道府県レベルの大会（公式試合）

実施の判断は、各都道府県サッカー協会が行う。
- b) センターマークおよびペナルティーマークは、直径22cmの円で描く。
- c) このマークはゴールラインまたはタッチラインから5cm離して直角に30cmの長さの白線とする。9.15mの距離は、コーナーアークの外側からこのマークのそれぞれゴール側の端またはハーフウェーライン側の端までとする。
- d) 日本国内での国際試合および国民体育大会等の全国的規模の大会でのフィールドの大きさは105m×68mとする（1985年11月21日理事会決定）。

なお、FIFAは、ワールドカップ、オリンピック等のフィールドの大きさを105m×68mと定めている。
- e) クロスバーおよびゴールポストの幅と厚さは、ともに12cmのものが最も適切とする。

品質と規格

ボールは、次のものとする。

- 球形
- 皮革または他の適切な材質
- 外周は、70cm（28インチ）以下、68cm（27インチ）以上
- 重さは、試合開始時に450g（16オンス）以下、410g（14オンス）以上
- 空気圧は、海面の高さの気圧で、0.6~1.1気圧（600~1100g/cm²：8.5~15.6ポンド／平方インチ）

欠陥が生じたボールの交換

試合の途中でボールが破裂する、または欠陥が生じた場合、

- 試合は、停止される。
- 試合は、もとのボールに欠陥が生じた場所で、交換したボールをドロップして再開される。ただし、ゴールエリア内でプレーが停止され、主審がプレーを停止したときにもとのボールがあった地点に最も近いゴールラインに平行なゴールエリアのライン上で交換したボールをドロップする場合を除く。

ペナルティーキックまたはペナルティーマークからのキックの途中で、ボールが前方に動き、他の競技者またはクロスバーまたはゴールポストに触れる前に破裂する、または欠陥が生じた場合、

- ペナルティーキックは、再び行われる。

ボールがインプレー中ではなく、キックオフ、ゴールキック、コーナーキック、フリーキック、ペナルティーキック、またはスローインのときに、ボールが破裂する、または欠陥が生じた場合、

- 試合は、そのときの再開方法で再開される。

試合中、ボールは主審の承認を得ずに交換できない。

国際サッカー評議会の決定

決定1

ボールは、第2条の要件に加え、FIFAや各大陸連盟の主催下で行われる公式競技会の試合において、次のいずれかのロゴが付けられていることを条件として使用が認められる。

- 公式の「FIFA承認」のロゴ
- 公式の「FIFA検定」のロゴ
- 「国際試合ボール基準」のロゴ



これらのロゴは、第2条に規定されている最低限の仕様に加えて、ロゴ別に規定された技術的要件を満たしていることが公式にテストされて証明されていることを示している。ロゴ別に定められた追加要件のリストは、国際サッカー評議会によって承認されたものである。テストを実施する検査機関はFIFAによって承認される必要がある。

加盟協会の競技会は、これら3つのロゴのいずれかを付けたボールの使用を要求することができる。

決定2

FIFAの競技会ならびに各大陸連盟および加盟協会の主催下で行われる公式競技会の試合では、ボールに一切の商業広告を付けることは認められない。ただし、競技会、競技会の主催者のエンブレムおよびメーカーの承認された商標は認められる。競技会規定において、これらのマークのサイズと数を制限することができる。

決定3

ゴールライン・テクノロジー（GLT）を使用する場合、このテクノロジーを導入したボールを使うことができるが、「FIFA承認」、「FIFA検定」、「国際試合ボール基準」のいずれかのロゴが付けられていなければならない（「決定1」を参照のこと）。

競技者の数

試合は、11人以下の競技者からなる2つのチームによって行われる。各チームの競技者のうちの1人はゴールキーパーである。いずれかのチームが7人未満の場合、試合は開始されない。

交代要員の数

公式競技会

FIFA、大陸連盟、または加盟協会の主催下で行われる公式競技会の試合では、いかなる試合でも最大3人までの交代を行うことができる。

競技会規定には、3人から最大12人までの範囲で、登録できる交代要員の数を明記しなければならない。

その他の試合

国際Aマッチにおいては、最大6人までの交代を行うことができる。

その他のすべての試合においては、次の条件を満たせば、より多い人数の交代を行うことができる。

- 関係チームが交代の最大人数について合意し、
- 試合前に主審に通知する。

試合前に、主審に通知されない場合、または関係チームが合意しなかった場合は、6人を超えて交代することはできない。

交代の進め方

すべての試合において、交代要員の氏名は試合開始前に主審に届けられなければならない。それまでに氏名が主審に届けられていない交代要員は試合に参加できない。

3 競技者が交代要員と交代する場合、次の条件を守らなければならない。

- 交代が行われることについて、事前に主審に通知する。
- 交代要員は、交代によって退く競技者がフィールドの外に出た後で、しかも主審の合図を受けてからフィールドに入る。
- 交代要員は、試合の停止中にハーフウェーラインのところからフィールドに入る。
- 交代は、交代要員がフィールドに入ったときに完了する。
- そのときからその交代要員は競技者となり、交代された競技者は交代して退いた競技者となる。
- 交代して退いた競技者は、その試合に再び参加することはできない。
- 交代要員は、出場するしないにかかわらず、主審の権限に従い、その管轄下にある。

ゴールキーパーの入れ替え

ゴールキーパー以外の競技者は、次の条件でゴールキーパーと入れ替わることができる。

- 入れ替わる前に主審に通知する。
- 試合の停止中に入れ替わる。

違反と罰則

交代要員または交代して退いた競技者が主審の承認なくフィールドに入った場合、

- 主審は、プレーを停止する（ただし、その交代要員や交代して退いた競技者がプレーに干渉していない場合、ただちに停止しない）。
- 主審は、その者を反スポーツ的行為で警告し、フィールドを離れるよう命じる。
- 主審がプレーを停止した場合は、プレーが停止されたときにボールがあった位置から相手チームの間接フリーキックでプレーは再開される（第13条—フリーキックの位置を参照）。

試合開始前に、主審に交代を通知することなく、氏名を登録された競技者に代わって氏名を登録された交代要員がフィールドに入った場合、

- 主審は登録された交代要員を続けて試合に参加することを認める。
- 登録された交代要員に対して懲戒の罰則を与えない。
- 問題を起こしたチームの交代の回数は減らさない。
- 主審は関係機関にこの事実について報告する。

主審の事前承認なく、競技者がゴールキーパーと入れ替わった場合、

- 主審は、プレーを続けることを認める。
- 主審は、次にボールがアウトオブプレーになったとき、かかわった競技者を警告する。

本条に関して、その他の違反があった場合、

- かかわった競技者は、警告される。
- プレーが停止されたときにボールがあった位置から相手チームの競技者によって行われる間接フリーキックでプレーは再開される（第13条—フリーキックの位置を参照）。

競技者と交代要員の退場

試合開始前に退場を命じられた競技者の補充は、氏名を届け出た交代要員に限って認められる。

3 試合開始の前後を問わず、氏名を届け出た交代要員が退場を命じられた場合、その補充はできない。

安全

競技者は、自分自身または他の競技者にとって危険な用具を用いる、あるいはその他のものを身につけてはならない（あらゆる装身具を含む）。

基本的な用具

競技者が身につけなければならない基本的な用具は次のものであり、それぞれに個別のものである。

- 袖のあるジャージーまたはシャツ——アンダーシャツを着用する場合、その袖の色はジャージーまたはシャツの袖の主たる色と同じでなければならない。
- ショーツ——アンダーショーツまたはタイツを着用する場合、それらはショーツの主たる色と同じものでなければならない。
- ストッキング——テープまたは同様な材質のものを外部に着用する場合、それは着用する部分のストッキングの色と同じものでなければならない。
- すね当て
- 靴

すね当て

- ストッキングによって完全に覆われている。
- ゴム、プラスチック、または同質の適切な材質でできている。
- それ相応に保護することができる。

色

- 両チームは、お互いに、また主審や副審と区別できる色の服装を着用しなければならない。
- それぞれのゴールキーパーは、他の競技者、主審、副審と区別できる色の服装を着用しなければならない。

違反と罰則

本条に関する違反があった場合、

- プレーは、停止される必要はない。
- 違反をした競技者は、主審にフィールドから離れて用具を直すように指示される。
- 用具を正していなければ、その競技者はボールが次のアウトオブプレーになったとき、フィールドから離れる。
- 用具を直すためにフィールドを離れるように求められた競技者は、主審の承認なくフィールドに復帰してはならない。
- 主審は、競技者のフィールドへの復帰を認める前に用具が正されたことを点検する。
- 競技者は、ボールがアウトオブプレーのときのみフィールドへの復帰が認められる。

本条に関する違反によりフィールドから離れるように求められた競技者が主審の承認を得ずにフィールドに再び入った場合、その競技者は警告されなければならない。

プレーの再開

警告をするために主審がプレーを停止した場合、

- 試合は、主審が試合を停止したときにボールがあった場所から、相手チームの競技者によって行われる間接フリーキックで再開される（第13条—フリーキックの位置を参照）。

国際サッカー評議会の決定

決定1

身に着けなければならない基本的な用具

競技者は、スローガンや広告のついているアンダーシャツを見せてはならない。身に着けなければならない基本的な用具には、政治的、宗教的または個人的なスローガンやメッセージ、あるいはイメージをつけてはならない。

スローガンや広告を見せるためにジャージーまたはシャツを脱いだ競技者は、競技会の主催者によって罰せられる。身に着けなければならない基本的な用具に、政治的、宗教的 または個人的なスローガンやメッセージ、あるいはイメージをつけた競技者のチームは、競技会の主催者またはFIFAにより罰せられる。

アンダーウェア

競技者は、政治的、宗教的または個人的なスローガンやメッセージ、あるいはイメージ、製造社ロゴ以外の広告のついているアンダーウェアを見せてはならない。

競技者および競技者のチームが、政治的、宗教的または個人的なスローガンやメッセージ、あるいはイメージ、製造社ロゴ以外の広告のついているアンダーウェアを見せた場合、競技会の主催者またはFIFAにより罰せられる。

主審の権限

各試合は、任命された試合に関して競技規則を施行する一切の権限を持つ主審によってコントロールされる。

職権と任務

主審は、

- 競技規則を施行する。
- 副審および第4の審判員がいる場合はそれらの審判員と協力して試合をコントロールする。
- 使用するすべてのボールを確実に第2条の要件に適合させる。
- 競技者の用具を確実に第4条の要件に適合させる。
- タイムキーパーを務め、また試合の記録をとる。
- 競技規則のあらゆる違反に対して、主審の裁量により試合を停止し、一時的に中断し、または中止する。
- 外部からのなんらかの妨害があった場合、試合を停止し、一時的に中断し、または中止する。
- 競技者が重傷を負ったと主審が判断した場合、試合を停止し、確実に負傷者をフィールドから退出させる。負傷した競技者は、試合が再開されたのちにのみフィールドに復帰できる。
- 競技者の負傷の程度が軽いと主審が判断した場合、ボールがアウトオブプレーになるまでプレーを続けさせる。
- 負傷によって出血した競技者を確実にフィールドから離れさせる。その競技者は、止血を確認した主審の合図を受けてからのみ復帰できる。
- 反則をされたチームがアドバンテージによって利益を受けそうなときは、プレーを続けさせる。しかし、予期したアドバンテージがそのときに実現しなかった場合は、そのもととなった反則を罰する。
- 競技者が同時に2つ以上の反則を犯した場合、より重大な反則を罰する。
- 警告または退場となる反則を犯した競技者に懲戒処置をとる。主審は、ただちにこの処置をとる必要はないが、次にボールがアウトオブプレーになったときにその処置をとらなければならない。

- 責任ある態度で行動しないチーム役員に対して処置をとり、さらに主審の裁量により、役員をフィールドおよびその周辺から立ち退かすことができる。
- 主審が見ていなかった出来事に関しては、副審の助言によって行動する。
- 認められていない者をフィールドに入らせない。
- 停止された試合の再開を合図する。
- 関係機関に審判報告書を提出する。^{f)} 報告書には、試合前、試合中または試合後の、競技者あるいはチーム役員に対する懲戒処置やその他の出来事に関する情報が含まれる。

主審の決定

プレーに関する事実についての主審の決定は、得点となったかどうか、また試合結果を含め最終である。

プレーを再開する前、または試合を終結する前であれば、主審は、その直前の決定が正しくないことに気づいたとき、または主審の裁量によって副審または第4の審判員の助言を採用したときのみ、決定を変えることができる。

国際サッカー評議会の決定

決定1

主審（また適用されるものに関しては、副審、第4の審判員）は、以下のことに法的な責任を負わない。

競技者、役員または観客のあらゆる負傷

すべての財産についてのあらゆる損害

主審の競技規則による決定または試合の開催、競技、管理に必要な一般的な進め方に基づく決定によって起きた、あるいは起きたであろうと思われる、個人、クラブ、会社、協会またはその他の団体に対するその他の損失

これらの決定には、以下のものが含まれる。

- フィールドやその周辺の状態または天候の状態が試合を開催できるかできないかの決定
- なんらかの理由による試合中止の決定
- 試合中に使用するフィールドの設備およびボールの適合性に関する決定
- 観客の妨害または観客席でのなんらかの問題により、試合を停止するかしないかの決定
- 負傷した競技者を治療のためにフィールドから退出させるために、プレーを停止するかしないかの決定
- 負傷した競技者を治療のためにフィールドから退出させる必要があるかないかの決定
- 競技者がある種の衣服や用具を着用することを認めるか認めないかの決定
- （主審の権限が及ぶ場所において）いかなる者（チームまたはスタジアムの役員、警備担当者、カメラマン、その他メディア関係者を含む）のフィールド周辺への立ち入りを許可するかしないかについての決定
- 競技規則またはその試合が行われるFIFA、大陸連盟、または加盟協会およびリーグの規約や規程にある任務に従って主審が下したその他の決定

決定2

第4の審判員が任命されているトーナメントまたは競技会においては、その役割と任務はこの冊子に記載されている国際サッカー評議会で承認されたガイドラインに従ったものでなければならない。

決定3

ゴールライン・テクノロジー（GLT）が各競技会規定に従って使用される場合、主審は試合前に、このテクノロジーの機能をテストする義務がある。実施すべきテストについては「FIFAクオリティ・プログラム」の「GLTテストマニュアル」に示されている。テクノロジーが「テストマニュアル」に沿って機能しない場合は、主審はGLTシステムを使用してはならず、この事実を各関係機関に報告しなければならない。

（公財）日本サッカー協会の決定

- f) （公財）日本サッカー協会主催の試合に関しては、210～211頁の書式の報告書を試合日を含めて2日以内に（公財）日本サッカー協会会長宛に提出する。

任務

副審を2人任命することができる。決定は主審が行うが、副審の任務は、次のときに合図をすることである。

- ボールの全体がフィールドの外に出たとき
- どちらのチームがコーナーキック、ゴールキックまたはスローインを行うのか
- 競技者がオフサイドポジションにいることによって罰せられるとき
- 競技者の交代が要求されているとき
- 主審に見えなかった不正行為やその他の出来事が起きたとき
- 反則が起き、主審より副審がよりはっきりと見えるときはいつでも（特定の状況下で、反則がペナルティーエリア内で起きたときを含む）
- ペナルティーキックのとき、ボールがけられる前にゴールキーパーがゴールラインを離れたかどうか、またボールがゴールラインを越えたかどうか

援助

さらに副審は、競技規則に従って試合をコントロールする主審を援助する。特に9.15m（10ヤード）の距離をコントロールする援助を行うために、フィールドに入ることができる。

不法な干渉、または不当な行為を行ったとき、主審はその副審を解任し、関係機関に報告する。

プレー時間

主審と両チームとが相互に合意しないかぎり、試合は、前、後半ともに45分間行われる。プレー時間の長さを変更する（明るさが十分でないために前、後半を40分間に短縮するなど）ための合意は、プレーの開始前になされ、また競技会規定に従ったものでなければならない。

ハーフタイムのインターバル

競技者には、ハーフタイムにインターバルを取る権利がある。

ハーフタイムのインターバルは、15分間を超えてはならない。

競技会規定には、ハーフタイムのインターバル時間を規定する。

ハーフタイムのインターバル時間は、主審の同意があった場合にのみ変更できる。

空費された時間の追加

次のことで時間が空費された場合、前、後半それぞれ時間を追加する。

- 競技者の交代
- 競技者の負傷の程度の判断
- 負傷した競技者の治療のためのフィールドからの退出
- 時間の浪費
- その他の理由

空費された時間をどれだけ追加するかは主審の裁量である。

ペナルティーキック

ペナルティーキックまたはそのやり直しが行われなければならない場合、ペナルティーキックが完了するまで前、後半の時間を延長する。

中止された試合

競技会規定に定められていなければ、中止された試合は再び行われる。

キックオフの定義

キックオフは、プレーを開始または再開する方法のひとつである。

- 試合開始時
- 得点ののち
- 試合の後半の開始時
- 延長戦が行われるとき、その前、後半の開始時

キックオフから直接得点することができる。

進め方

試合および延長戦開始時のキックオフ前

- コインをトスし、勝ったチームが試合の前半に攻めるゴールを決める。
- 他方のチームが試合開始のキックオフを行う。
- トスに勝ったチームは、試合の後半開始のキックオフを行う。
- 試合の後半には、両チームはエンドを替え、反対のゴールを攻める。

キックオフ

- 一方のチームが得点したのち、他方のチームがキックオフを行う。
- すべての競技者は、フィールドの自分たちのハーフ内にいなければならない。
- キックオフをするチームの相手競技者は、ボールがインプレーになるまで9.15m（10ヤード）以上ボールから離れる。
- ボールは、センターマーク上に静止していなければならない。
- 主審が合図する。
- ボールは、けられて前方に移動したときインプレーとなる。
- キッカーは、他の競技者がボールに触れるまで、ボールに再び触れてはならない。

違反と罰則

他の競技者がボールに触れる前にキッカーがボールに再び触れた場合、

- 違反が起きたときにボールがあった位置から行われる間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

キックオフの進め方に関して、その他の違反があった場合、

- キックオフを再び行う。

ドロップボールの定義

ドロップボールは、ボールが依然インプレー中で、主審が競技規則のどこにも規定されていない理由によって、一時的にプレーを停止したときに、プレーを再開する方法である。

進め方

主審は、プレーを停止したときにボールがあった場所でボールをドロップする。ただし、ゴールエリア内でプレーが停止された場合、ドロップボールは、プレーを停止したときにボールがあった地点に最も近いゴールラインに平行なゴールエリアのライン上で行う。

ボールがグラウンドに触れたときにプレーが再開される。

違反と罰則

次の場合、ボールを再びドロップする。

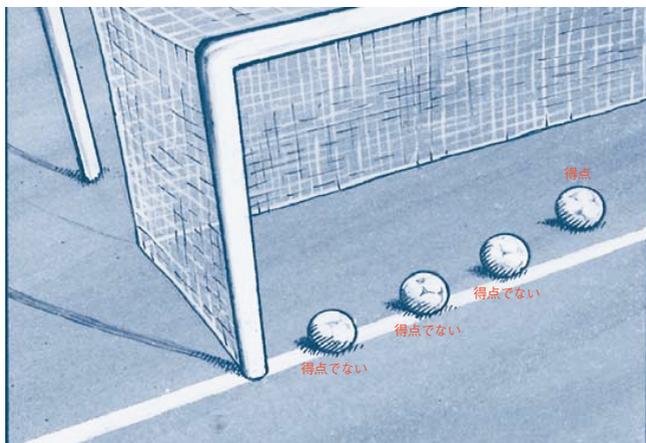
- ボールがグラウンドに触れる前に競技者がボールに触れる。
- ボールがグラウンドに触れたのち、競技者が触れることなくフィールドの外に出る。

ボールがゴールに入った場合、

- ドロップしたボールがけられて直接相手競技者のゴールに入った場合、ゴールキックが与えられる。
- ドロップしたボールがけられて直接そのチームのゴールに入った場合、相手チームにコーナーキックが与えられる。

得点

ゴールポストの間とクロスバーの下でボールの全体がゴールラインを越えたとき、その前にゴールにボールを入れたチームが競技規則の違反を犯していなければ、1得点となる。



勝利チーム

試合中により多く得点したチームを勝ちとする。両チームが同点または共に無得点の場合、試合は引き分けである。

競技会規定

試合またはホームアンドアウェーの対戦が終了し、競技会規定として勝者を決定する必要がある場合、国際サッカー評議会が承認した次の方法のみが認められる。

- アウェーゴール・ルール
- 延長戦
- ペナルティーマークからのキック

ゴールライン・テクノロジー (GLT)

GLTシステムは、得点があったかどうかを検証し、主審の決定を援助するために使用することができる。GLTの使用は、各競技会規定に明記されなければならない。

オフサイドポジション

オフサイドポジションにいること自体は、反則ではない。

競技者は、次の場合オフサイドポジションにいることになる。

- 競技者がボールおよび後方から2人目の相手競技者より相手競技者のゴールラインに近い。

競技者は、次の場合オフサイドポジションにいないことになる。

- 競技者がフィールドの自分のハーフ内にいる。または、
- 競技者が後方から2人目の相手競技者と同じレベルにいる。または、
- 競技者が最後方にいる2人の相手競技者と同じレベルにいる。

反則

ボールが味方競技者によって触れられるかプレーされた瞬間にオフサイドポジションにいる競技者は、次のいずれかによってそのときのプレーにかかわっていると主審が判断した場合にのみ罰せられる。

- プレーに干渉する。または、
- 相手競技者に干渉する。または、
- その位置にいることによって利益を得る。

反則ではない

競技者が次のことからボールを直接受けたときはオフサイドの反則ではない。

- ゴールキック
- スローイン
- コーナーキック

違反と罰則

オフサイドの反則があった場合、主審は違反の起きた場所から行う間接フリーキックを相手チームに与える（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ファウルと不正行為は、次のように罰せられる。

直接フリーキック

競技者が次の7項目の反則のいずれかを不用意に、無謀にまたは過剰な力で犯したと主審が判断した場合、直接フリーキックが相手チームに与えられる。

- 相手競技者をける、またはけろうとする。
- 相手競技者をつまずかせる、またはつまずかせようとする。
- 相手競技者に飛びかかる。
- 相手競技者をチャージする。
- 相手競技者を打つ、または打とうとする。
- 相手競技者を押す。
- 相手競技者にタックルする。

次の3項目の反則のいずれかを犯した場合も、直接フリーキックが相手チームに与えられる。

- 相手競技者を押さえる。
- 相手競技者につばを吐く。
- ボールを意図的に手または腕で扱う（ゴールキーパーが自分のペナルティーエリア内にあるボールを扱う場合を除く）。

直接フリーキックは、反則の起きた場所から行う(第13条—フリーキックの位置を参照)。

ペナルティーキック

ボールがインプレー中に、競技者が自分のペナルティーエリア内で上記の10項目の反則のいずれかを犯した場合、ボールの位置に関係なく、ペナルティーキックが与えられる。

間接フリーキック

ゴールキーパーが自分のペナルティーエリア内で、次の4項目の反則のいずれかを犯した場合、間接フリーキックが相手チームに与えられる。

- 自分のものとしたボールを放すまでに、手で6秒を超えてコントロールする。
- 自分のものとしたボールを手から放したのち、他の競技者が触れる前にそのボールに手で再び触れる。
- 味方競技者によって意図的にゴールキーパーにキックされたボールに手または腕で触れる。
- 味方競技者によってスローインされたボールを直接受けて手または腕で触れる。

競技者が次のことを行ったら主審が判断した場合も、間接フリーキックが相手チームに与えられる。

- 危険な方法でプレーする。
- 相手競技者の進行を妨げる。
- ゴールキーパーがボールを手から放すのを妨げる。
- 第12条のこれまでに規定されていないもので、競技者を警告する、または退場させるためにプレーを停止することになる反則を犯す。

間接フリーキックは、反則の起きた場所から行う(第13条—フリーキックの位置を参照)。

懲戒の罰則

イエローカードは、競技者、交代要員、または交代して退いた競技者に警告されたことを知らせるために使用される。

レッドカードは、競技者、交代要員、または交代して退いた競技者に退場が命じられたことを知らせるために使用される。

競技者または交代要員あるいは交代して退いた競技者のみにレッドカードまたはイエローカードが示される。

主審は、フィールドに入ったときから試合終了の笛を吹いたのちフィールドを離れるまで、懲戒の罰則を行使する権限をもつ。

フィールドの内外にかかわらず、相手競技者、味方競技者、主審、副審、その他の者に対して、警告または退場となる反則を犯した競技者は、犯した反則の質に従って懲戒される。

警告となる反則

競技者は、次の7項目の反則のいずれかを犯した場合、警告され、イエローカードを示される。

- 反スポーツ的行為
- 言葉または行動による異議
- 繰り返し競技規則に違反する
- プレーの再開を遅らせる
- コーナーキック、フリーキックまたはスローインでプレーが再開されるときに規定の距離を守らない
- 主審の承認を得ず、フィールドに入る、または復帰する
- 主審の承認を得ず、意図的にフィールドから離れる

交代要員または交代して退いた競技者は、次の3項目の反則のいずれかを犯した場合、警告される。

- 反スポーツ的行為
- 言葉または行動による異議
- プレーの再開を遅らせる

退場となる反則

競技者、交代要員または交代して退いた競技者は、次の7項目の反則のいずれかを犯した場合、退場を命じられる。

- 著しく不正なファウルプレー
- 乱暴な行為
- 相手競技者またはその他の者につばを吐く
- 意図的にボールを手または腕で扱い、相手チームの得点または決定的な得点の機会を阻止する（自分のペナルティーエリア内でゴールキーパーが行ったものには適用しない）
- フリーキックまたはペナルティーキックとなる反則で、ゴールに向かっていて相手競技者の決定的な得点の機会を阻止する
- 攻撃的な、侮辱的な、または下品な発言や身振りをする
- 同じ試合の中で二つ目の警告を受ける

退場を命じられた競技者、交代要員または交代して退いた競技者は、フィールド周辺及びテクニカルエリア周辺から離れなければならない。

フリーキックの種類

フリーキックは、直接と間接のいずれかである。

直接フリーキック

ボールがゴールに入る

- 直接フリーキックが行われ、ボールが相手ゴールに直接入った場合、得点となる。
- 直接フリーキックが行われ、ボールが自分のゴールに直接入った場合、コーナーキックが相手チームに与えられる。

間接フリーキック

シグナル

主審は、片腕を頭上に上げて間接フリーキックであることを示す。主審は、キックが行われ、他の競技者がボールに触れるかまたはアウトオブプレーになるまで、その腕を上げ続ける。

ボールがゴールに入る

キックされたのち、ゴールに入る前に他の競技者がボールに触れた場合のみ得点となる。

- 間接フリーキックが行われ、ボールが相手ゴールに直接入った場合、ゴールキックが与えられる。
- 間接フリーキックが行われ、ボールが自分のゴールに直接入った場合、相手チームにコーナーキックが与えられる。

進め方

直接フリーキック、間接フリーキック、いずれの場合もキックが行われるときボールは静止していなければならない。キッカーは、他の競技者がボールに触れるまでボールに再び触れてはならない。

フリーキックの位置

ペナルティーエリア内のフリーキック

守備側チームの直接フリーキックまたは間接フリーキック

- すべての相手競技者は、9.15m（10ヤード）以上ボールから離れなければならない。
- すべての相手競技者は、ボールがインプレーとなるまでペナルティーエリアの外にいないなければならない。
- ボールは、ペナルティーエリア外に直接けり出されたときインプレーとなる。
- ゴールエリア内で与えられたフリーキックは、そのエリア内の任意の地点から行うことができる。

攻撃側チームの間接フリーキック

- すべての相手競技者は、ボールがインプレーになるまで、自分のゴールポスト間のゴールライン上に立つ場合を除いて、9.15m（10ヤード）以上ボールから離れなければならない。
- ボールは、けられて移動したときインプレーとなる。
- ゴールエリア内で与えられた間接フリーキックは、違反の起きた地点に最も近いゴールラインに平行なゴールエリアのライン上で行われなければならない。

ペナルティーエリア外のフリーキック

- すべての相手競技者は、ボールがインプレーになるまで9.15m（10ヤード）以上ボールから離れなければならない。
- ボールは、けられて移動したときにインプレーとなる。
- フリーキックは、違反の起きた場所、または違反が起きたときにボールのあった位置から行われる（違反の種類による）。

違反と罰則

フリーキックを行うとき、相手競技者が規定の距離よりボールの近くにいる場合、

- キックは、再び行われる。

ペナルティーエリア内で守備側チームがフリーキックを行ったとき、ボールが直接ペナルティーエリアから出なかった場合、

- キックは、再び行われる。

ゴールキーパー以外の競技者によるフリーキック

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前に、キッカーがボールに再び触れた場合（手または腕による場合を除く）、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前に、キッカーが意図的にボールを手または腕で扱った場合、

- 違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

- 違反がキッカーのペナルティーエリアの中で起きた場合は、ペナルティーキックが与えられる。

ゴールキーパーによるフリーキック

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前に、ゴールキーパーがボールに再び触れた場合（手または腕による場合を除く）、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前に、ゴールキーパーが意図的にボールを手または腕で扱った場合、

- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリアの外で起きた場合は、違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。
- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリアの中で起きた場合は、違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

44 第14条 ペナルティーキック

直接フリーキックを与える10項目の反則のひとつを、自分のペナルティーエリアの中でボールがインプレー中に犯したとき、相手チームにペナルティーキックが与えられる。

ペナルティーキックから直接得点することができる。

前、後半の終了時および延長戦の前、後半の終了時に行うペナルティーキックのために、時間は延長される。

ボールと競技者の位置

ボールは、

- ペナルティーマーク上に置かなければならない。

ペナルティーキックを行う競技者は、

- 特定されなければならない。

守備側のゴールキーパーは、

- ボールがけられるまで、キッカーに面して、両ゴールポストの間のゴールライン上にいなければならない。

キッカー以外の競技者は、次のように位置しなければならない。

- フィールドの中
- ペナルティーエリアの外
- ペナルティーマークの後方
- ペナルティーマークから少なくとも9.15m（10ヤード）以上

進め方

- 主審は、競技者が競技規則どおりの位置についてを確認した上で、ペナルティーキックを行うための合図をする。
- ペナルティーキックを行う競技者は、ボールを前方にけらなければならない。
- 他の競技者がボールに触れるまで、キッカーは再びボールをプレーしてはならない。
- ボールは、けられて前方に移動したときインプレーとなる。

ペナルティーキックを通常の時間内に行う、あるいは前、後半の時間を延長して行うまたは再び行うとき、ボールが両ゴールポスト間とクロスバーの下を通過する前に、次のことがあっても得点は認められる。

- ボールがゴールポスト、クロスバー、ゴールキーパーのいずれかまたはそれらに触れる。

主審は、ペナルティーキックがいつ完了したか決定する。

違反と罰則

主審がペナルティーキックを行う合図をして、ボールがインプレーになる前に、次の状況のひとつが起きた場合、

ペナルティーキックを行う競技者が競技規則に違反する。

- 主審は、そのままキックを行わせる。
- ボールがゴールに入った場合、キックが再び行われる。
- ボールがゴールに入らなかった場合、主審はプレーを停止し、試合は、違反の起きた場所から行われる守備側チームの間接フリーキックで再開される。

ゴールキーパーが競技規則に違反する。

- 主審は、そのままキックを行わせる。
- ボールがゴールに入った場合、得点が認められる。
- ボールがゴールに入らなかった場合、キックが再び行われる。

キックを行う競技者の味方競技者が競技規則に違反する。

- 主審は、そのままキックを行わせる。
- ボールがゴールに入った場合、キックが再び行われる。
- ボールがゴールに入らなかった場合、主審はプレーを停止し、試合は、違反の起きた場所から行われる守備側チームの間接フリーキックで再開される。

ゴールキーパーの味方競技者が競技規則に違反する。

- 主審は、そのままキックを行わせる。
- ボールがゴールに入った場合、得点が認められる。
- ボールがゴールに入らなかった場合、キックが再び行われる。

守備側、攻撃側両チームの競技者が競技規則に違反する。

- キックが、再び行われる。

ペナルティーキックが行われたのちに、

他の競技者がボールに触れる前に、キッカーがボールに再び触れる（手または腕による場合を除く）。

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

他の競技者がボールに触れる前に、キッカーが意図的にボールを手または腕で扱う。

- 違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ボールが前方に進行中、外的要因がボールに触れる。

- キックが、再び行われる。

ボールがゴールキーパー、クロスバー、ゴールポストからフィールド内にはね返ったのち、外的要因がボールに触れる。

- 主審は、プレーを停止する。
- プレーは、外的要因がボールに触れた場所で、ドロップボールにより再開される。ただし、ゴールエリア内でプレーが停止された場合、ドロップボールは、プレーを停止したときにボールがあった地点に最も近いゴールラインに平行なゴールエリアのライン上で行う。

スローインは、プレーを再開する方法のひとつである。

スローインは、グラウンド上または空中にかかわらず、ボールの全体がタッチラインを越えたとき、最後にボールに触れた競技者の相手側に与えられる。

スローインから直接得点することはできない。

進め方

ボールを投げ入れるとき、スローワーは、

- フィールドに面する。
- 両足ともその一部をタッチライン上またはタッチラインの外のグラウンドにつける。
- 両手でボールを持つ。
- 頭の後方から頭上を通してボールを投げる。
- ボールがフィールドから出た地点から投げる。

すべての相手競技者は、スローインが行われる地点から2 m（2ヤード）以上離れなければならない。

ボールは、フィールドに入ったときにインプレーとなる。

ボールを投げたのち、スローワーは他の競技者が触れるまで再びボールに触れてはならない。

違反と罰則

ゴールキーパー以外の競技者によるスローイン

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にスローワーがボールに再び触れた場合（手または腕による場合を除く）、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にスローワーが意図的にボールを手または腕で扱った場合、
- 違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。
- 違反がスローワーのペナルティーエリアの中で起きた場合は、ペナルティーキックが与えられる。

ゴールキーパーによるスローイン

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にゴールキーパーがボールに再び触れた場合（手または腕による場合を除く）、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にゴールキーパーが意図的にボールを手または腕で扱った場合、

- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリアの外で起きた場合は、違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。
- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリアの中で起きた場合は、違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

相手競技者がスローワーを不正に惑わせたり妨げたりした場合、

- その競技者は、反スポーツ的行為で警告される。

本条に関するその他の違反に対して、

- 相手チームの競技者がスローインを行う。

ゴールキックは、プレーを再開する方法のひとつである。

ゴールキックは、グラウンド上または空中にかかわらず、最後に攻撃側競技者が触れたボールの全体がゴールラインを越え、第10条による得点とならなかったときに与えられる。

相手チームのゴールに限り、ゴールキックから直接得点することができる。

進め方

- ボールは、ゴールエリア内の任意の地点から守備側チームの競技者によってけられる。
- 相手競技者は、ボールがインプレーになるまで、ペナルティーエリアの外にいる。
- 他の競技者がボールに触れるまで、キッカーはボールを再びプレーしてはならない。
- ボールは、ペナルティーエリア外に直接けり出されたときにインプレーとなる。

違反と罰則

ゴールキックからボールが直接ペナルティーエリア外にけり出されなかった場合、

- キックが再び行われる。

ゴールキーパー以外の競技者によるゴールキック

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にキッカーがボールに再び触れた場合（手または腕による場合を除く）、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にキッカーが意図的にボールを手または腕で扱った場合、

- 違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。
- 違反がキッカーのペナルティーエリアの中で起きた場合は、ペナルティーキックが与えられる。

ゴールキーパーによるゴールキック

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にゴールキーパーがボールに再び触れた場合（手または腕による場合を除く）、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にゴールキーパーが意図的にボールを手または腕で扱った場合、

- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリアの外で起きた場合は、違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。
- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリアの中で起きた場合は、違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

本条に関して、その他の違反があった場合、

- キックは、再び行われる。

コーナーキックは、プレーを再開する方法のひとつである。

コーナーキックは、グラウンド上または空中にかかわらず、最後に守備側競技者が触れたボールの全体がゴールラインを越え、第10条による得点とならなかったときに与えられる。

相手チームのゴールに限り、コーナーキックから直接得点することができる。

進め方

- ボールは、ゴールラインを越えた地点に最も近い方のコーナーアークの中に置かなければならない。
- コーナーフラッグポストを動かしてはならない。
- 相手競技者は、ボールがインプレーになるまで、コーナーアークから9.15m（10ヤード）以上離れなければならない。
- 攻撃側チームの競技者がボールをけらなければならない。
- ボールは、けられて移動したときにインプレーとなる。
- 他の競技者がボールに触れるまで、キッカーは再びボールをプレーしてはならない。

違反と罰則

ゴールキーパー以外の競技者によるコーナーキック

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にキッカーがボールに再び触れた場合（手または腕による場合を除く）、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にキッカーが意図的にボールを手または腕で扱った場合、

- 違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。
- 違反がキッカーのペナルティーエリアの中で起きた場合は、ペナルティーキックが与えられる。

ゴールキーパーによるコーナーキック

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にゴールキーパーがボールに再び触れた場合（手または腕による場合を除く）、

- 違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

ボールがインプレーになって、他の競技者が触れる前にゴールキーパーが意図的にボールを手または腕で扱った場合、

- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリアの外で起きた場合は、違反の起きた場所から行う直接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。
- 違反がゴールキーパーのペナルティーエリアの中で起きた場合は、違反の起きた場所から行う間接フリーキックが相手チームに与えられる（第13条—フリーキックの位置を参照）。

本条に関して、その他の違反があった場合、

- キックは、再び行われる。

アウェーゴール、延長戦およびペナルティーマークからのキックは、試合が引き分けに終わったのち、勝者となるチームを決めることが競技会規定によって要求されているときに勝者を決定する三つの方法である。

アウェーゴール

競技会規定には、ホームアンドアウェー方式で競技する場合で第2戦後に合計ゴール数が同じであるとき、アウェーのグラウンドで得点したゴール数を2倍に計算する規定を設けることができる。

延長戦

競技会規定には、それぞれ15分間を超えない範囲で前、後半同じ時間の延長戦を設けることができる。これには、第8条の条件が適用される。

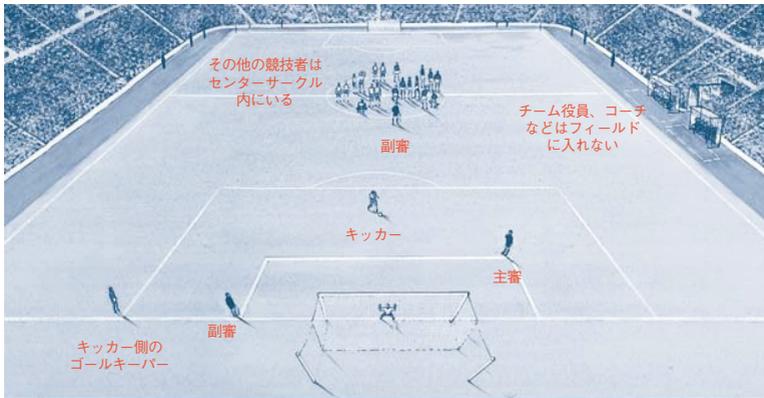
ペナルティーマークからのキック

進め方

- 主審は、キックを行うゴールを選ぶ。
- 主審はコインをトスし、トスに勝った主将のチームが先にけるか後にけるかを定める。
- 主審は、行われたキックの記録をつける。
- 次の条件に従って、両チームが5本ずつのキックを行う。
- キックは、両チーム交互に行われる。
- 両チームが5本のキックを行う以前に他方が5本のキックを行ってもあげることができない得点を一方のチームがあげた場合、以後のキックは行われない。
- 5本ずつのキックを行ったのち、両チームの得点と同じ場合、または両チームとも無得点の場合は、同数のキックで一方のチームが他方より多く得点するまで、交互の順序を変えることなく、キックは続けられる。
- ペナルティーマークからのキックの進行中にゴールキーパーが負傷してゴールキーパーとしてのプレーが続けられなくなったとき、そのチームが競技会規定に定められた最大数の交代を完了していない場合であれば、氏名を届けられている交代要員と交代することができる。
- 上記の例外を除いて、延長戦のある場合はそれを含めて、試合終了時にフィールドにいた競技者のみにペナルティーマークからのキックを行う資格が与えられる。

- それぞれのキックは異なる競技者によって行われ、資格あるすべての競技者がキックを行わなければならない、その後はいずれの競技者でも2本目のキックを行うことができる。
- 資格のある競技者は、ペナルティーマークからのキックの進行中にいつでもゴールキーパーと入れ替わることができる。
- ペナルティーマークからのキックの進行中、資格のある競技者と審判員のみがフィールドの中にいることができる。
- キッカーと両ゴールキーパー以外、すべての競技者は、センターサークルの中になければならない。
- キッカー側のゴールキーパーは、フィールドの中で、キックの行われているペナルティーエリアの外で、ゴールラインとペナルティーエリアの境界線との交点のゴールライン上にいなければならない。
- 他に規定されていない限り、競技規則または国際サッカー評議会の決定の関係諸条項がペナルティーマークからのキックが行われるときにも適用される。

ペナルティーマークからのキック



- 試合が終了し、ペナルティーマークからのキックを行う前に、一方のチームの競技者数が相手チームより多い場合、競技者のより多いチームは相手競技者数と等しくなるように競技者数を減らさなければならない。チームの主将は、除外するそれぞれの競技者の氏名と選手番号を主審に通知しなければならない。従って除外された競技者は、ペナルティーマークからのキックに参加することができない。
- ペナルティーマークからのキックを開始する前に、主審はセンターサークル内に両チームの同数の競技者がとどまっていることを確かめなければならず、これらの競技者がキックを行うことになる。

テクニカルエリアはスタジアムでの試合において用いられるもので、以下に示されるよう、エリア内にはチーム役員と交代要員の座席部分が設置される。

テクニカルエリアの大きさや位置はスタジアムによって異なるが、以下の点を一般的な指針としてここに示す。

- テクニカルエリアは、特定された座席部分から両横に1 m（1ヤード）、前方にタッチラインから1 m（1ヤード）の範囲である。
- テクニカルエリアを明確にするためにマーキングをすることが勧められる。
- テクニカルエリアに入ることのできる人数は、競技会規定によって規定される。
- テクニカルエリアに入ることのできる者の氏名は、競技会規定に従って試合開始前に特定される。
- その都度ただ1人の役員のみが戦術的指示を伝えることができる。
- トレーナーやドクターが競技者の負傷の程度を判断するため主審からフィールドに入る承認を得た場合などの特別な状況を除いて、監督およびその他のチーム役員は、エリア内にとどまっていなければならない。
- 監督およびその他テクニカルエリアに入る者は、責任ある態度で行動しなければならない。

- 第4の審判員は、競技会規定に基づいて任命することができ、リザーブ副審が任命されていない限り、3名の審判員のいずれかがその職務を続行することができなくなった場合にその職務を行う。第4の審判員は、つねに主審を援助する。
- 競技会の主催者は、競技会開始に先立って、主審がその職務を続行することができなかった場合に、第4の審判員が主審として務めるのか、第1副審が主審となって第4の審判員が副審を務めるのかを明確にしておく。
- 第4の審判員は、主審によって要請された試合前、中、後の管理上の任務を援助する。
- 第4の審判員は、試合中の交代手続きを援助する責任を持つ。
- 第4の審判員は、交代要員の用具をフィールドに入場する前に点検する権限を持つ。用具が競技規則に適合していない場合、主審に伝える。
- 第4の審判員は、必要に応じ、ボールの交換を管理する。試合中にボールを交換しなければならなくなった場合、主審の指示によって別のボールを供給することによって時間の遅延を最小にする。
- 第4の審判員は、競技規則に従って、主審が試合をコントロールするのを援助する。しかしながら、主審は、プレーに関するすべての事柄を決定する権限を持つ。
- 試合が終了したのち、第4の審判員は、主審や副審が見えなかった不正行為やその他の出来事について、関係機関に報告書を提出しなければならない。第4の審判員は、作成した報告書について主審と副審に知らせなければならない。
- 第4の審判員はテクニカルエリアに入っている者が責任ある行動を取らなかった場合、主審に伝える権限を持つ。
- 競技会規定に基づき、リザーブ副審も任命することができる。その任務は、唯一職務を続行することができなくなった副審に、または必要に応じ第4の審判員に代わることである。

追加副審は競技会規定に基づいて任命される。追加副審は、その競技会を担当できるカテゴリー以上の審判員でなければならない。

競技会規定は、主審がその職務を続行することが不可能になった場合、次の手順のいずれかを規定しなければならない。

1. 第4の審判員が主審の職務を行う、または
2. 上級の追加副審が主審の職務を行い、第4の審判員が追加副審を務める。

任務

決定は主審が行うが、追加副審として任命されたものは、次のときに合図する。

- ボールの全体が、ゴールラインを越えてフィールドの外に出たとき
- どちらのチームがコーナーキックやゴールキックを行うのか
- 主審に見えなかった不正行為やその他の出来事が起きたとき
- 反則が起き、主審より追加副審がよりはっきり見えるときはいつでも。特にペナルティーエリア内で起こった反則について
- ペナルティーキックのとき、ボールがけられる前にゴールキーパーがゴールラインを離れたかどうか、またボールがゴールラインを越えたかどうか

援助

さらに追加副審は、競技規則に従って試合をコントロールする主審を援助するが、最終決定はつねに主審が行う。

不法な干渉、または不当な行為を行ったとき、主審はその追加副審を解任し、関係機関に報告する。

